

全國大会

昭和五十三年五月十一日(木)

御案内の通り辰巳会全国大会を恒例に依り京都東山大雲院南溪園別院に於て盛大に繰り括げられた。出席者百六十名に及んだ。前日の雨天には憂慮晴天を期待した甲斐あって明け方から回復したことは何よりも喜ばしかつた。

定刻時には続々満面笑みをた、えて万縁滴たらんとする会場へと脚を運ばれた。大広間を見渡すと早くも準備された鉄鉢料理の朱塗りの椀が整頓良く諸兄の参集を待ち構えているかのようだつた。こ



会務報告

小倉幹事

毎年の事とは言え五月の月に這入りますと大会の準備は大体整っておりますが最も前日気をもむことは天候図を見て一喜一憂今年もその例に洩れず昨夜は一時間ごとに眼を覚まして空を眺めておりましたが幸にしてこのような五月晴を迎えたのである。さて先刻

御承知の事と存じますが去る五月三日憲法記念日に際し、相原浩氏御承知の事と存じますが去る五月三日憲法記念日に際し、相原浩氏飛び出すことでしょう。さて先刻御承知の事と存じますが去る五月三日憲法記念日に際し、相原浩氏飛び出すことでしょう。さて先刻

会務報告を終らせて頂きます。

引き続き大幡幹事長マイクの前に開会の辞が述べられた。剛快なる声量で参集者への謝辞、特に思ひがけないNHKのロケの方々に感激の辞を寄せられた。

次に御多忙中の鈴木治雄氏馳せ来られ先ず長寿の会員の健康を祝福されたのち現在御活躍中の太陽鉱工の現況の盛運振りに就いての詳細を述べられた。一同一言聞き洩らさじと拝聴場内は水を打つたようであった。次にこの佳き日、本会場を憩の場として御提供載いた佐藤善議方丈から当山の縁起に就いての講話を拝聴することにな

が勲四等瑞宝章叙勲の栄に浴されましたことは御家門の御榮誉之れに過ぎるものはありません。謹んで御喜び申し上げます。

次にこの度NHKでは、経営者の倒産のモラル「金子直吉と現代経営者」の取材に大塚放送記者出張され近々皆様のお宅の茶の間に届くこと、思います。

次に「たつみ」誌二十九号唯今編集にかかりつ、ありますので何と昨年全国大会以後の方とを合しまして二十五名の方々を本大会に先立ち去る二日六甲祥竜寺に於いて本部幹事諸兄立合いの上宗信禪師の嚴修にて供養塔に合祀の法要を當みました。

之らの御靈に対し一分間の黙祷を捧げることに致します。有難う御座いました。

以上の様に簡単ではありませんが、開会の辞が述べられた。剛快なる声量で参集者への謝辞、特に思ひがけないNHKのロケの方々に感激の辞を寄せられた。

次に御多忙中の鈴木治雄氏馳せ来られ先ず長寿の会員の健康を祝福されたのち現在御活躍中の太陽鉱工の現況の盛運振りに就いての詳細を述べられた。一同一言聞き洩らさじと拝聴場内は水を打つたようであった。次にこの佳き日、本会場を憩の場として御提供載いた佐藤善議方丈から当山の縁起に就いての講話を拝聴することにな

る。

茲は天正十五年正親町天皇が田信長の父子の菩提を弔う為、開山貞安上人に「御池御所」を賜り長のメツセージが届いたのでこれを柳田幹事が謹んで代読した。

「今日の全国大会御盛会のこと

代役として柳田幹事が壁に張られたプログラムに依つて進行を始めることとなる。開会に魁け高畠会長のメツセージが届いたのでこれを柳田幹事が謹んで代読した。

内に溢れ京名物泉仙謹製になる鉢料理に銘々の箸が動き始まる。

名古屋支部幹事の発声でかんじよ

山貞安上人に「御池御所」を賜り

と…広大なる南溪園の規模を見

下るへ移されましたが時運に従い繁幸の中心地と成り、去る昭和三十七年伽藍の一部伽迦の山荘をこの南溪園に創建されることになる

造園美の卓絶無比、四季折々の触

の風物は捨て難いと述べられる。

と…広大なる南溪園の規模を見

ると東山三十六峰を借景としての

運河の卓絶無比、四季折々の触

の風物は捨て難いと述べられる。

と…広大なる南溪園の規模を見

ると東山三十六峰を借景としての

運河の卓絶無比、

全国大会出席者名簿

昭和五十三年五月十一日

於 京都大雲院南谷別院（南溪園）

東京支部春の例会

昭和五十三年三月二十四日

清水日本平探勝と豊年製油清水工場訪問

出席者五十一名

○ 来 佐	藤 善	賓 譲 師
○ 来 桂	芳 男	御 令 室 様
N N K 記 者 殿	(三名)	同 金
田 高 瀬 嶋 鈴 斎 梶 菊 木 小 後 大 請 上 安	○ 東 京	○ 東 京
代 橋 脇 内 木 藤 川 池 村 島 藤 川 家 川 野 東	○ 東 京	○ 東 京
義 八 同 文 桃 同 丸 扁 同 增 同 輝 七 圭 同 金	○ 東 京	○ 東 京
雄 郎 伴 寿 枝 伴 衛 吉 伴 男 郎 実 介 謙 実 耳 伴 治 浄	○ 東 京	○ 東 京
上 久 小 牧 ○ 北 海 道 伏 西 田 竹 伊 尾 岡 ○ 山 宮 松 細 藤 西 西 鍋 田 田 中 奈 良 三	○ 四 国	○ 九 州
保 松 原 豊 豊 俊 一 卓 豊 同 清 幸 志 義 守 竹 翰 翰 義 鎌 次 同 政 同 伴	○ 北 海 道	○ 九 州
同 秀 恒 太 郎 二 助 藏 次 郎 伴 子 助 良 美 惠 代 吉 夫 郎 一 喜	○ 北 海 道	○ 九 州
伴 樹 秀 一 郎 三 一 雄 吉 起 伴 実 津 子 通 伴 一 茂 次	○ 北 海 道	○ 九 州
小 岡 奥 小 大 大 江 岩 岩 池 今 今 井 井 石 萩 飯 安 ○ 松 末 西 高 石 野 上 久 保	○ 九 州	○ 九 州
倉 田 川 谷 幡 口 永 濑 田 村 村 原 原 本 崎 高 東 本 本 次 木 同 伴	○ 九 州	○ 九 州
五 さ さ 多 喜 淳 久 英 聖 政 冬 二 藤 次 郎 同 喜 久 次 奈 恒 同 英 德 同 伴	○ 九 州	○ 九 州
郎 く き 子 一 章 三 一 雄 吉 起 伴 実 津 子 通 伴 一 茂 次	○ 九 州	○ 九 州
柴 柴 白 里 佐 阪 佐 々 濑 阪 金 神 川 菊 北 北 金 窪 源 後 内 宇 津 津 小 野 三	○ 九 州	○ 九 州
田 田 井 野 倉 木 上 上 子 居 口 池 野 月 田 島 藤 山 宇 津 津 小 野 三	○ 九 州	○ 九 州
栄 楠 同 同 寿 卯 武 同 ヤ 同 忠 次 郎 一 秋 浩 音 ふ 雄 耐 同 亥 同 伴	○ 九 州	○ 九 州
忠 健 次 郎 伴 伴 夫 伴 伴 子 伴 子 喜 喜 郎 夫 保 央 弘 吉 さ 一 篤 伴	○ 九 州	○ 九 州
深 福 広 浜 畑 橋 橋 野 仁 中 長 月 千 武 谷 田 田 高 高 鎮 鈴 下 雅 意	○ 九 州	○ 九 州
川 本 戸 中 本 本 原 賀 村 嶋 岡 頭 井 口 中 中 高 番 番 鎮 鈴 木 治 亀 吉	○ 九 州	○ 九 州
三 同 忠 同 四 知 貫 利 元 同 サ 元 一 正 真 千 代 野 喜 代 子 岩 健	○ 九 州	○ 九 州
清 郎 伴 吉 伴 郎 薫 郎 重 司 一 義 伴 隆 ダ 一 郎 子 一 俊	○ 九 州	○ 九 州
(以上一六〇名) 鶯 尾 横 山 山 柳 柳 柳 安 森 森 宮 水 三 松 松 松 岩 健	○ 九 州	○ 九 州
千 鶴 子 同 周 同 鍊 秀 敏 同 直 政 義 正 好 弁 同 二 同 平 同 大 重 俊 男 朗 一 展 作	○ 九 州	○ 九 州
伴 伴 作 伴 伴 造 子 明 伴 子 江 一 道 子 勝 吉 伴 伴 介 佐	○ 九 州	○ 九 州

清水日本平探勝と豊年製油清水工場訪問 出発、天気は上々である。日本橋のあたりより高速道路に入り、多摩川を越すと程なく相模平野の山手に落語の「大山詣り」の大雄山が右手新緑に覆はれて見える。このあたりから白雪を頂いた富士山が頭を出して来る。昨秋の例会で訪れた日発の子会社でネジのトープラ(株)のある泰野の街や食事や古今文化民俗資料館をみた光鶴園もこのあたりである。大井松田より山北を経て足柄休憩所までのが「東名」の最も難工事を極めた区間で山腹縫う如くトンネルをいくつか抜けて走る道路には酒匂川の渓流を高さ百米に近い橋梁で越す事になる。このあたりは速度も八十キロ以下に制限されている。足柄のトイレ休憩後御殿場を経て富士川を渡るまでの右手には白雪に輝く富士山は其の巨大な姿を走り去る樹間を透かして目のあたり圧倒されそうに見えるのである。一点の雲もなきこの好天この状態



快晴の富士を背景に清水日本平山上にて(東京辰巳支部春の例会)

で日本平山上での眺める迄続くよう祈る心持で一路清水に向つてバ

スはあるのである。清水のインターチェンジで高速を下り昔の東海

道江戻の宿を横切り日本平山上のホテル前に着いたのは昼頃である。バスから降り振り返って下の方の清水の漾から続く興津の山並みの上に高々と姿を現わす麗峰富士の景観は特に絶景である。

アーランカッた春先きにこんなに良く晴れた日は滅多にないと土地の人の言である。この景観にあこがれてバスのない昔から之の山上に皆登つたのである。

先ず記念撮影をと良い場所を捲がしたが附近はゴルフ場のローンでウツカリ入つてホテルから文句を言われ漸く不満足だが撮つた写真がこれである。幸い富士山は写っている。ホテルへ日商岩井清水支店よりアレンヂして貰つた食事であるが、予算の関係もあり余りウマクなかつたし、ホテルのサービスももう一つと言う工合でこれには不評だったが景色で埋め合せとあきらめる。

これから久能山東照宮への予定をカットして山を下り豊年製油に向う。

豊年製油清水工場訪問

この会社は今日は完全に三井グループの経営になっている。今回このの見学交渉に当つた幹事の小島実氏(元豊年役員)の尽力で、

心良く見学も叶い常務取締役塗原ループの経営になつてゐる。今回このの見学交渉に当つた幹事の小島実氏(元豊年役員)の尽力で、

清之助工場長を始め幹部の人々の手厚い好遇を受け其の上会社製品のテンプラ油外数々のお土産まで項載して辞去したのであるが、本日一行中の会員木村七郎氏は大正六年にこの工場敷地獲得の為、静岡県の埋立地払い下げに携つて居り、宮本政次郎、小宮小四郎氏などと共に県庁に足繁く通つたものだと感慨深げに語る。小野三郎氏も本店から派遣されて来て居られたそうである。その時代工場設立に關し、昭和二十五年に発刊された文献として「金子直吉傳」に依り豊年製油の項を抜粋して見る。

『大正三年第一次歐洲大戰勃發により俄然世界の経済界は大変動を來し各國の植物油欠乏は其の極に達し、滿洲に於ける大豆油は各国よりの註文殺倒、斯くて鈴木商店製油部は此の機に乘じ大連工場の能力を拡張、更に大正六年靜岡県清水港に五〇屯能力の工場、同七年に鳴尾横浜に各二五〇屯の工場を建設し以て本邦最大の製油工場とした。然るに大正七年平和條約が締結今までの好況に酔える経済界は遂に逆転、恐慌の大旋風は各所に倒産破産を生み、鈴木商店も漸次整理の止むなきに至り